大魔道士は救える者を救いたい

みゃーがわ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作１５年後、魔界で魔王となったダイの側近として魔界で力をふるい続けた大魔道士ポップ。

死を前にして自分が何者であったのかを思い出す。

そして精神のみを幼いころの自分に逆行させることに成功する。

逆行したポップは地上、魔界、精霊界、天界を改変することを誓う。

目次

【序章】――― 1
【ポップ5歳にして同棲を始める】――― 7
【ヒュンケル兄さんをピュアに育てる会】――― 16
【長兄のほのぼの日常生活】――― 33
【長兄は待っていました】――― 39
【妹たちは想っていた以上に規格外でした＜前編＞】――― 44

【序章】

短いが果てしなく大きい人生だった。
死の間際ポップはそう思う。
まだ少年だった時家を逃げ出す形で勇者の家庭教師に無理やり弟子入りした。
１年後１５歳という若さで世界を救う戦いをした。
５年後先の戦いで魔界へ落ちたらしい勇者を救うため単身魔界へ乗り出した。
魔界で勇者と再会を果たし魔界に広がる暗雲を取り払い魔界をも救った。
その後魔界を統制する者が居たかったためポップの勇者は魔王へとなった。
それから１０年。
ポップは禁呪、または禁呪に比例するほどの大魔術を使い続けたせいで無理がたたって短い人生を今終えようとしていた。
重臣たちは既に部屋を出て貰っている。
今ベッドに身を沈めたポップの周りを囲うのはポップの勇者ダイ、ダイと共に魔界へ降りたラーハルト、そしてクロコダインの３人だけ。
「ポップ!ポップ!!俺を置いて行かないでよ!お前が居ないと俺魔界で立つことなんて

出来ないよ!!」
「バーカ、泣いてんなダイ。俺が居なくてもラーハルトもおっさんも、今ではお前を慕う魔族たちも居る。お前は1人じゃない。どうかこれからも真っ直ぐ…生き抜いてくれ……ラーハルト、おっさんダイを頼むな」
「お前に言われなくとも俺はこの命尽きるまでダイ様に仕える。だから安心して逝け」
「ポップ、願わくば転生したお前に会えることを願う。お前は良くやった、もうゆっくり眠れ」
「へへ、サン…キュ……」
　バチンっ
「「「!?」」」
　突如ポップのバンダナが弾け飛んで燃え尽きた。
「あぁ…そう言う事か……俺も思ったより、運が…なかったかな……」
「ポップ！一体何が!?」
　ダイがポップの肩を掴むと既にポップはこと切れていた。
　……
「はぁ、成功したか。死ぬ間際に咄嗟に編み出した術だったから巧く行くかは賭けだったんだがな」

（ポップさん！目を覚まされたのですね!!）
「メルル!?まさか俺の術に巻き込まれたのか!!」
（いいえ、私が自ら伴ったのです。だから今回は最初からご一緒させて下さいね）
「良いのか？あの一瞬で俺の術に気付いたんなら俺がどういう存在か解っているだろう？それでも俺に付いて来てくれるのか？」
（はい、私は今度こそ生涯を貴方と伴にします）
「ありがとうメルル。じゃぁ俺は今度は精霊族に力を封印されないようにして最高の状態のまま救える人たちを救う！もうダイを魔王にさせたりなんかしない！そして太陽を欲したバーンも助ける!!」
（私も力の使い方を学んでポップさんの足手まといにならないようにします。貴方が何になろうとも貴方の隣を歩きます。貴方の隣にもう1人伴に歩む者が居たとしても）
「そこまで解ってしまっているのか」
（今度こそ、幸せになりましょう。ポップさんと私とポップさんが密やかに想っていたあの方と3人で）
「でもアイツには何も言わないでくれよ」
（大丈夫ですよ、きっとあの方もポップさんを好きになります……）
「全部バレバレかよ」

（ふふ、魔界に行っても時を遡っても心が通じ合ったままだった私たちの間で隠し事はなしですよ）

「了解、んじゃ俺は明日に備えて寝るか。多分俺の記憶が確かなら精霊族が俺に封印のバンダナを付けに来るのは明日の筈だからな」

（はい、頑張って下さいねポップさん）

「あぁ絶対今度は力を封印何てさせねぇ！みんなで幸せになるんだ!!」

……

「初めまして坊や。今少しお話し良いですか？」

誰も居ない河原で座っていたポップに声をかけたのは若葉色の髪に金色の瞳の年若い少女だった。

彼女の正体を知っているポップにとっては「少女」でないと知っているのだが。

「挨拶は無しで良いぜ精霊さん。そして俺はあんたから黄色いバンダナをもらうつもりはない」

「何故あなたがその事を!?」

「説明すんの面倒くさいから俺の記憶を見て貰うぜ」

パチン、とポップが指を鳴らす。

直後精霊の頭の中にポップの前の世界での記憶が一瞬にして流れ込んできた。

「貴方は、こんな未来を……」
「あぁだから俺は力を封じられる訳にいかないんだ。俺の力が天界の脅威になるのは解っている。それでも俺は全力で救える相手を救いたい」
「その中に大魔王バーンですら含まれているのですね」
「あぁバーンは太陽に焦がれただけだ。それを解消する術は今の俺にならある。力を封印されていない俺になら」
「しかし貴方はその力を封じなければその身を危険に晒すことになるでしょう。貴方のその黄金律、そして両性具有の身体は大魔王すら凌駕する魔力を得ることも出来るでしょう。そしてその身を狙うものは後を絶たないはず。それでも良いと言うのですかポップ」
「願う所だ。なぁ精霊さん、俺に賭けてみてくれないか?俺は地上も魔界も精霊界も全て救えるところまで救って見せる!!天界はまぁ動き次第で決めるわ」
「分かりました……未来から来た貴方を信じましょう。ポップ、世界を託します、世界を、救って下さい!!」
「あぁ俺の新しい冒険は今からだ!」
　ポップ5歳の誕生日。
　この日、前回の世界よりも10年も早く2代目大魔道士が誕生した。

つづく

【ポップ5歳にして同棲を始める】

（ポップさん、明日はお暇ですか？良ければテランまでお越し願いたいのですが）
「メルルか。明日なら暇だぜ。何時ごろ向かえばよい？」
（では昼食の用意をしておきますので正午頃気下さい）
「ん、了解。お休みメルル」
（はい、お休みなさいポップさん）
ポップとメルルは未来の大戦に備えて逆行した日から毎日精神通話をしている。
互いに未来を知る者として何も知らない他の者とは意識が違うため、自分たちの精神を会話することで慰め合っているのかもしれない。
巨大な秘密を抱える共犯者としても2人は同志なのである。
これから未来で大戦が起こる。
それを5歳の子供2人が叫んだところで「そういう遊びなのだろう」と誰も本気にしてくれないことを精神的には既に成人している2人には解っているからだ。
もし皆に伝える事が出来たなら魔王軍が襲ってくる前に戦いの準備も出来ただろう。
しかしそれは不可能だ。

救えない命が多すぎることに2人の心は負荷を背負っていた。
それをこうして毎夜精神のみでも通じ合わせることで心の安定を保つようにとしていた。
……
ドーン!!
大きな着地音を立ててテランの地へ飛んで来たのはポップである。
まだ正午少し前といったところだ。
逆行してからは行った事のない地でも過去の記憶を頼りにルーラが使用できることが判明した。
これはポップにとって大きなアドバンテージであった。
過去、ポップは世界の全てを回っている。
行った事のない地など無いほどに。
「コレなら…アイツを救う事も出来る……」
グッと掌に掴んだ希望の光を逃がさないように拳を固めた。
「あぁやっぱりポップさんでしたのね」
「メルル！」
「ルーラの着地音でポップさんだろうと思って急いで出て来てしまいました」

そう言うわりにメルルの息はあがっていない。
「自己鍛錬を始めたのです。占いの力だけでは貴方の横に立てませんから」
どうやらポップの考えが通じてしまったらしい。
メルルはクスクスと笑った。
そのあどけない笑みにポップは思わず赤面する。
「どうされました？」
「いや、メルルは前回でもあんまり笑っている所は見たことが無かったから新鮮で見とれちまった」
「ポップさん…魔界に行って口が上手くなったんじゃないですか／／／？」
ポップの言葉にメルルも赤面する。
５歳児同士が赤面し合って見つめ合っているのは傍から見たならさぞ微笑ましい光景であったろう。
その雰囲気もすぐに終わりを告げる。
「メルル！どこへ行ったんだい!!」
「ナバラお婆様っ」
メルルはポップの手を掴むと声のした方へ走り出した。
……

「それで近頃言っていたポップ、てのがその子かい？」
美味しそうな昼食を囲みナバラがポップをジッと見てくる。
その視線に居た堪れなくなったポップだが隣の席で自分の方を見てニコニコ笑う無邪気なメルルの手前下手な行動にも出られない。
「はいお婆様！この人が私が人生を共に歩む方のポップさんです！」
「ングッ!!」
「大丈夫ですかポップさん、はいお茶です」
ゴクゴクゴク
突然のメルルの爆弾発言にパンを喉に詰まらポップへメルルがすぐさまお茶を渡す。
「ん、サンキュ、メルル。で、突然何言って!?」
「ポップさんは私と共に人生を歩むのはお嫌なのですか？」
メルルの黒目がちな黒曜石のような大きな瞳が次第に潤んでくる。
外見が５歳児な事も含め非常に庇護欲がそそる姿である。
ゆえに罪悪感が半端ない。
「イヤじゃねーよ！な、だから泣なよメルル」
ポップン小さな手がメルルの目尻の涙を拭う。
その手にメルルは己の小さな手を重ね瞳を閉じてその体温を感じ取ろうとした。

（どうやらポップというこの小僧もメルルの事を知っているようじゃな…ランカークスとかいう山奥の小さな村が出身じゃと言っておったが2人は何処で知り合ったんじゃ？）

泣いたカラスがもう笑ったという立ち直りの速さでメルルはニコニコ微笑む。

隣のポップもフワリ、と花咲くような微笑みを浮かべる。

少女めいたポップの顔立ちと相まって、その笑みは性別を感じさせない。

（少年…じゃよな……）

自分の孫が同性愛者の素質を5歳にして目覚めたわけでは無いとナバラは心からポップが少年であることを願った。

ナバラの目から見て孫の瞳は恋する瞳だ。

いや、恋すら飛び越えて己が孫は隣に座る少年に深い愛を感じさせる。

1か月前、突然大人びて良くしゃべる様になったメルルに一体何があったのか？

その答えが横の少年であるとナバラは感じ取った。

「お婆様、この前のお話ポップさんのご両親に通して下さいますか？」

不安そう双眸でメルルがナバラを見つめる。

ポップに心から愛情を抱いているメルルを見てナバラは自分が妥協せねばこの孫は家出しかねないと思いしぶしぶ承諾の声をあげた。

「メルル、俺の両親への話しって何だ？」
「私がポップさんの家で一緒に暮らす事です！」
ブッ
今度こそポップは口に含んでいたモノを噴き出した。
……
「そう言う訳でして我が孫のメルルがお宅様の息子さんのポップ君と一緒に暮らすと申しておりまして……」
「はぁ、でもポップはまだ５歳ですが…そちらのお孫さんも同じくらいのお年ですよね？」
「はい、５歳になります。義父様、義母様」
「ポップ、お前はどう思ってるんだ！」
眉間に皺を寄せたジャンクが息子に問う。
いきなり手が出ないあたり前回と違い自分の子供が半分女の子なのだと理解しているのであろう。
「俺も、メルルと暮らしたい。メルルと一緒じゃなきゃ出来ないことがあるんだ！」
「それはここ１か月お前が教会の魔導書読み漁ったり体鍛えだしたりしたのに関係あるのか？」

「親父、知ってたのかよ…」
「自分の子供の行動ぐらい知らなくて親が出来るか」
「ポップ、女の子と一緒に暮らす意味は解っているの？貴方だけじゃなくメルルちゃんの将来にも響くことなのよ」
「分かってるよお袋。俺はメルルと生涯を伴にするつもりだ」
「私もポップさんと生涯を伴にする覚悟をしています」
２人の眼差しは5歳の子供のモノではなかった。
芯の通った全ての覚悟を決めた瞳。
机の下で強く握られていた２人のてが小さく震えていることに大人たちは気付いていた。
「分かった、メルルちゃんだったか？ポップを宜しく頼む」
ジャンクがメルルに頭を下げた。
「そうね、メルルちゃんポップはちょっとおっちょこちょいな所もあるけど嘘はつかない子よ。ちゃんとメルルちゃんを大切にすると思うわ。これから宜しくね」
「義父様も義母様も頭を上げて下さい！こちらこそ、不束者ですが宜しくお願いいたします」
「ナバラさん、メルルは絶対不幸にさせたりなんかしないから、メルルを俺に下さい」

真っ直ぐな視線がナバラを射抜く。
この少年は間違いなくメルルを幸せにしてくれるであろうと確信した。
「メルル。ポップ君と一緒にで良いからたまにはテランに顔を出すのじゃよ。ポップ君、メルルを頼みます」
「はい、メルルは必ず護ります！」
「有り難う御座いますお婆様!!」
２人の事もが椅子から降り、地に頭を付けて大人たちに礼を述べた。
「あらあら、ポップもメルルちゃんも何処でそんな事覚えてきたの？これからは皆が家族になるんだからそんな重苦しいことは無しよ」
ニッコリ笑うスティーヌの顔は何処か未来のポップによく似ていた。

「で、貴方どうしようかしら？」
「無理に引き離したらメルルが泣くからな、まだ５歳なんだし良いんじゃないのか？」
メルルは無事ポップの家へ引き取られ同じ部屋で生活する権利をもぎ取った。

「子供の姿も時には役に立つのですね」
「何か言ったかメルル？」

「いえ、何でもありませんわポップさん。それよりお休みでしたら…」
声に出さないメルル。
心を読み取れと言う事だろう。
「えぇ／／／／!?」
メルルは瞳を閉じてその時を待っている。
「～～～～～エイッ」
チュッ♡
ポップ５歳。
前の人生では遂に叶わなかったファーストキスを５歳にしてすませる。
そして２人は一つのベッドで寝ることになった。
（今は５歳児の身体とは言え精神は３０歳だし意識すんなって方がむりだろーーー!!）
メルルの方を向かず寝ようとするポップの後姿をバレないようにクスリと笑った。
どうやらメルルは逆行してかなり精神的に強くなり過ぎたようである。

【ヒュンケル兄さんをピュアに育てる会】

春の日差しがポカポカと体を温める今日この頃。

湖の畔に花々が咲き誇ったのをいい機会だとポップとメルルは瞳で合図し合うと２人してニッコリと無邪気な笑顔を浮かべた。

次の日、ポップとメルルはスティーヌにお弁当を作って貰うと（勿論できた子供の２人はしっかりお手伝いもした）ピクニックに出かけると言って家を出て行った。

５歳の子供２人ではそう遠いところまで行かないだろうと村の大人たちも安心して２人が村から出るのを見届けた。

きっと最近２人が良く遊んでいる（ように見せかけて連日修行を重ねている）森の方へと言ったのだろうと当たりを付けた。

まさか２人が元魔王ハドラーの城跡である【地底魔城】に向かったなどと夢にも思わなかっただろう。

……

「あったー!!」

「それが「魂の貝殻」ですか?」

「おう！前回マァムが持って来たヤツと全く同じだ。一応内容も確認するか」

そっと貝殻を小さな耳に当てる。

貝殻から聞こえてくる声はポップ自身は初めて聞いたものだったけど情と騎士道精神に溢れた性格でヒュンケルからも武人の鑑として尊敬されていたと言われるバルトスが残した言葉はその内面を映すように心から息子の事を愛し、光ある未来へ導こうとする暖かな父親の言葉であった。

「――っ　ん、ポップさん！」

「あ、メルル、俺…」

「これ使って下さい」

メルルからハンカチを手渡される。

無意識にポップは涙を流していたらしい。

（あぁヒュンケルはどれ程悲しかったのだろう。１２歳だったダイが父親のバランを亡くした時でさえあれ程悲しかったのに、ヒュンケルは6歳で父親を亡くしたんだ。今の俺と同じ年頃の子供が父親を殺されて、敵を憎まない訳がない……だからこそ、ヒュンケルには前同じ道を歩ませちゃ駄目だ。もう、自分は幸せになる価値がないなんて、誰かを幸せに出来ないなんてそんな風に心を歪めて成長させるわけにはいかない!!）

ポップの強い想いがメルルにも伝わったのであろう。

メルルも強い眼差しをポップに返して無言で大きく頷いた。
「でもどうやってヒュケルさんを救出するのですか？この時期は魔界に居るのでは？」
バーンが地上を侵略に来るのはこれより１０年後だ。
まだ地上に来ていない以上大魔王六軍団も魔界に居るとメルルは考えたのだろう。
「いや、ヒュンケルは地上に居るはずだ。魔族と魂の契約をしたならともかく戦士のアイツが魔界の瘴気に当てられて何年も生きていられるはずがない。バーンは魔力が強すぎるがために自身の通れる穴を空けるのに１５年かかった。ならハドラーが助けられて空白の１５年は何をしていたのか」
「その間に大魔王六軍団を作り上げた？」
「あぁおそらくそうだろう。そして奴等が居るのは死の大地と思って間違いないだろう。ヒュンケルはアバン先生に突っかかって川に落ちたところをミストバーンに拾われたと言っていた。ミストバーンは魔力そのものはほぼ封じられているからバーンよりも早く地上に来れたんだろうな。ヒュンケルは現在ミストバーンに師事を受けているはずだから死の大地に行けば取り返せるはずだ。アイツが１人も殺す前に、アバン先生の誤解を解いてこちら側に連れ戻さねーと」
「ええ、早くヒュンケルさんに再び家族の愛情を思い出して貰いたいですね。私も頑張ります」

「今のヒュンケルは何言ってもまだガキだからな。大人の余裕ってヤツを見せつけてやんよ」
　ニコリとメルルが微笑めばニヤリとポップが笑みを返す。
「では私はこの3人分のお弁当を守りながらまだ隠しアイテムがないか此処を詮索してみます。おそらくまだ隠しアイテムが有るようですから」
「んじゃ俺はちょっとばかり死の大地に行ってやさぐれてるガキを指導して連れて帰って来るわ」
「お気をつけて」
「あぁ、んじゃ行ってくる。ルーラ！」
　ポップの身体が光に包まれて死の大地の方へ飛び立っていった。
「さぁ私も早くアイテムを探さないと。ポップさんの方はそんなに時間かからないでしょうから」
　ポップが去った空を眺め、メルルは3人分のお弁当が入ったバスケットを抱え直して城の跡地に再び足を踏み入れた。
　：：：
「はぁ、はぁ、――――クソッ！」
　まだ線の細い成長期前の少年が床に身を投げていた。

来ている衣服はズタボロで所々血液がこびり付いた跡がある。
衣服は汚れ顔にも体にも傷を負っているものの少年の整った顔立ちは隠せていなかった。
むしろ傷ついたその様が綺麗なものを傷つきたいと思う人の心の加虐心をそそりそうでもある。
銀色の髪は無造作に伸びているが少年の野性味を引き出している。
この美麗な少年が今まで魔物の手にかからなかったのは偏にに彼の師の存在が背後にあるからだろう。
少年を痛めつけたのも又その師であるのだが。
「お兄ちゃん大丈夫?」
「っ!?」
銀髪の少年が目を開くと自分の顔を性別を感じさせない5歳ほどの子供が覗き込んでいた。
(何時の間に!?いや、それよりなぜ人間の子供がこんな所に……?)
「はい、お兄ちゃんにプレゼントだよ」
無邪気にニコリと微笑んで、子供は少年―ヒュンケルに貝殻を渡す。
「耳に当てて」

コテン、と首を傾げる子供は酷く無邪気で愛らしい。
本来なら警戒しなければならない相手なのだがその無邪気な瞳につい警戒を緩めてしまう。
言われたままヒュケルは貝殻を自分の耳に当てる。
其処から聞こえてきたのは――――
「そんな、父さんっ!!嘘だ、嘘だっ!!!」
「お兄ちゃんのお父さんはそんな嘘をつく人?」
陰りを一切知らない子供の無垢な瞳がヒュンケルの瞳を射抜く。
「嘘、なんか　つく人じゃ　な　い……」
ヒュンケルに頬に温かい液体が伝う。
それを子供は小さな指で救う。
「俺は、アバンに何て…事を……」
目の前でうずくまり涙を流すヒュンケルの姿を見て母性か父性かに目覚めた子供―ポップはその銀色の頭を引き寄せてギュッと自分の胸に抱え込んだ。
「大丈夫、まだ遅くないから。俺と一緒に帰ろう?太陽の下へ」
ポップの顔を驚いた顔で見ているヒュンケルに優しく微笑んでやり、未だポロポロ流す涙を唇で掬い取ってやる。

そのまま瞼に鼻の頭に額に両頬へ、ポップはヒュンケルにキスを振らせる。
鳥の羽でなぞられた様な優しい、それでいて温かいその感触にヒュンケルの涙は止まり、その包み込むような優しさにウットリと瞳を閉じた。
「ヒュンケル、お前は俺が守ってやるよ。何も怖いことは無い。俺と一緒に行こう？な？」
ポップの背に腕廻して頭を胸に埋めていたヒュンケルは小さくコクリと頷いた。
「でも、どうやってココから出るんだ？」
「まぁ任せろって」
ニパッと今度は子供らしく笑ったポップはヒュンケルの手を握る。
その暖かな自分より小さな手に何故かヒュンケルの不安は掻き消された。
ポップはヒュンケルと繋いでいない方の手を空に向けて――
「イオッ！」
ドゴ――――――ッ!!
並の魔法使い十数人分のイオナズンに匹敵するイオを放ち鬼岩城の天井まで大きな穴を空けた。
ヒュンケルの記憶が確かなら自分が居る場所は鬼岩城の中でもかなり下層の方に居た気がするのだが…上を見上げれば見事に大きな穴が開き青空が目に入ってきた。

「しっかり捕まってろよ」
その言葉に繋いでいる手にギュッと力を籠める。
それを確認したポップはヒュンケルに安心させるように微笑むを空を見上げルーラを唱えメルルの待つ地底魔城へと飛び立った。
……
「初めましてメルルと申します。ポップさんのお宅で暮らしている占い師見習いです」
「俺はヒュンケルと言う」
「良い名前ですね、ヒュンケルさん」
ニコリとメルルが微笑んだ。
その笑顔にヒュンケルはポップの笑顔をよく似ていると感じた。
相手に対して一切悪意のない優しい微笑みだ。
「改めて俺はポップ。宜しくなヒュンケル」
フワリ、と花が綻ぶような笑顔をポップが浮かべる。
その優し気な声と笑顔にヒュンケルは頬を赤らめる。
(男…だよな……)
「さぁどっちだろーな」
「!?」

心を読まれたと分かってヒュンケルの顔が真っ赤になった。
「俺には性別の概念が無いもんだと思っていてくれ。ヒュンケルが捉えたい方の性別で認識してもらって構わないから」
「あ、あぁ。宜しくポップ」
ポップの名を口に乗せると何故か甘い果実を口にしたような甘やかさが口に広がった。
「それで、俺はこれからどうすれば良いんだ？」
「そうだな、まずは…」
「「昼食!!」」
２人の子供がバスケットを開いた。
そこには素朴だが子供の手でも食べやすいようにと小さめに作られたサンドイッチやタルトが入っていた。
「じゃ、手洗うぞ。メルルと、ほらヒュンケルここに手を出して」
何もない空間に手を広げさせられヒュンケルは首を傾げる。
「んじゃ、ヒャド、んでメラ」
ポンと大ぶりな氷塊が空中に浮かぶと殆どタイムラグの無い時間で飛んで来たメラの炎でぬるま湯となって３人の手に降り注いだ。

「はい、ポップさん、ヒュケルさんタオルです」
「おう、サンキューなメルル」
「あ、あ、りが　とう」
「何赤くなってんだよヒュンケル。言っとくがメルルは俺の家族だからな。変な気起こすなよ。ついでに言うと今日からお前も俺の家族な」
「――――――ッ!!」
ヒュンケルの双眸が見開かれる。
「目玉落ちるぞ。拾ってきてそれじゃぁお前は元気に暮らせよ、なんて無責任な事するかよ。責任もってお前は俺の家族にする」
「かぞく……」
「あ～～～～もう又泣く。ほらそんなに泣いたら目が腫れちまうだろうが」
ヒュンケルの頭を引き寄せポップは再び唇で涙を拭ってやる。
その際軽めのホイミをかけて目が腫れないようにしているのは内緒である。
流石に過保護すぎて自分が恥ずかしい。
しかも精神年齢的に自分より子供だとはいえ「あの」ヒュンケルが相手なのだから余計にだ。
メルルがクスクス笑ってて余計に恥ずかしい。

「お2人とも、早く昼食食べちゃいましょ。ヒュンケルさんもどうぞ。義母様の作る料理は何でも美味しいんですよ」
　メルルが小ぶりの卵サンドをヒュンケルに手渡すと敷物の上に座り自分の横をポンポンと叩いた。
「？」
「横どーぞってよ」
「俺なんかが横に座って怖くないか？」
「何かあったらポップさんが何とかしますから何も怖くないですよ。それに捨てられた子犬のような瞳をしている方を怖いとは思いませんから」
「良かったな、子犬だってよ」
　ニマニマと今度はポップは少年らしい笑みを浮かべる。
　そのコロコロ変わる表情がヒュンケルの淀みきっていた心を少しづつ晴らしていく。
「ほら、食おうぜ」
　ヒュンケルの手を引きメルルの横に座らせるとポップは2人の向かいに座った。
　ジッと手の中のサンドイッチを見ていると2人が不思議そうな顔でヒュンケルを見ている。
　その視線に居た堪れなくなってヒュンケルは決意をきめて恐る恐るサンドイッチを

口にした。
「……美味い」
「お、マジか?それ俺が作ったヤツだわ」
「ポップが、作ったのか?」
毒も入っていなく瘴気に侵されてもいない。
愛情だけがこもった手料理。
ヒュンケルの心は何故かポカポカと温かくなっていく。
その事に不思議に思いながらも幼いころ自分が過ごした城で家族で食事を取って。
(あぁコレは父さんと居た頃と同じ気持ちだ)
無意識に小さく微笑んでいるヒュンケルに2人は気付かないふりをして笑いあった。
……
「そう言う訳だからコレが今日から家族になるヒュンケル。部屋は俺の部屋で良いから」
「〜〜〜お前はっ!今日から家族じゃない!今度はどこから連れて来たんだ!!」
「あらあら今度はちょっと大きい子が来たわね。ピクニックに行って人を拾ってくるなんて珍しいこともあるものね」
「スティーヌ、そう言う問題じゃない!」

「すみません…俺は出ていくのでポップ達を怒らないで下さい……」
「出ていくって当てはあるの？」
「……」
「いいわ、ヒュンケル君ね。これからはウチの家族になったんだから私のことはお母さんて呼んで頂戴ね。それからあっちの怒りっぽい私の旦那さんはお父さんで良いわよ」
「……俺は、迷惑では……？」
「子供が迷惑とか気にしなくて良いのよ。そうね困ったことがあるとすれば今は客人用の寝間が無いからポップの部屋で3人過ごすことになるけど良いかしら？」
「――――――有り難う、御座います!!」
バッ、とヒュンケルが腰を折り頭を下げる。
「本当今の子供ってどこでそんな挨拶覚えるのかしら？アナタ、部屋を増やすのはすぐには無理だから明日にでもベッド見に行きましょうね」
「お前がそこまで言うならまぁ良いだろう。だがなヒュンケル、この家の子供になるんだったら1番年上として下2人の面倒は見て貰うからな！」
「はいっ！有り難う御座います、お父さん、お母さん」
泣き笑いのような表情のヒュンケルを見て、皆は（ヒュンケルの方が面倒見られる立場になるんだろうな）と思ったとか。

ヒュンケル11歳、前の世界では孤独だった男は2人の弟妹と両親を得て暮らす事となった。

……

子供部屋、ポップのベッドでポップを中心にして3人で川の字で寝ている所ヒュンケルがポップに質問してきた。

「そう言えばポップはイオでは鬼岩城を破壊するほどの威力だったがメラとヒャドは苦手なのか？」

「んにゃ、一応初級攻撃呪文はイオと同じくらい威力あるぜ。同じ呪文でも威力を自由に操作してこそ一端の魔法使いだからな。ある程度の補助系呪文も同じように契約しているし」

「そう言えばルーラも簡単に使っていたな」

「ヒュンケルこそあの鎧の剣持って来たんだな」

「あぁ所有者の体のサイズに合わせて鎧になるから何かと便利なんだ。と言うかアレが鎧になると俺は言っただろうか？」

「あぁお前が倒れ込む前に白装束野郎と手合わせしてる所見てたからな。正直ソレが有るのと無いのじゃ戦闘のアドバンテージが天と地ほどの差だからな。あの混乱した状態でアレを持って来たのは偉い」

ポップの小さな手がヒュンケルの銀色の頭を撫でる。
嬉しそうに目を細めるヒュンケルは本当に拾われた子犬のようである。
鬼岩城にミストバーンに気付かれず忍び込んでいたと言うとんでもない事実は今のヒュンケルの頭では考えつかなかった。

「私は地底魔城からいくつかアイテムを見つけました」
ベッドから降りて大きな袋（荷物持ち係はヒュンケルである）から床にアイテムを転がすように出していく。
※メルルは道具を取り出した※

【ウィザードスタッフ】
「魔眼」の付いた杖。
攻撃力５４、攻撃魔力＋１５、ＭＰ吸収率７．５％。
【まほうのほうい】
守備力は３９。
デイン系以外の攻撃呪文によるダメージを２／３に軽減する特殊効果が備わっている。

☆ポップは旅立つ時の装備を手に入れた。

【フェアリーテイル】
最大攻撃力は５５と高く、特殊能力も豊富
・前方３方向に攻撃可
・攻撃が当たるとＨＰが４回復
・たまに敵の行動を１ターン止める
・サビ無効

【風のローブ】
守備力＋３８、さらに物理攻撃の回避率が１／４になる。
☆メルルは旅立つ時の装備を手に入れた。

【奇跡の石】
戦闘中に使うと味方１人のＨＰを３０～３５ポイント回復する。
☆ヒュンケルは回復アイテムを手に入れた。

大魔王進撃まで後１０年――――

つづく

【長兄のほのぼの日常生活】

ポップの家にヒュンケルが引き取られて3日。
現在ポップの部屋にはベッドが2つある。
1つはヒュンケル用のシングルベッド。
因みにポップのお下がりだ。
2つ目はポップとメルルが2人で寝るためのダブルベッド。
ダブルベッドを置くことで大して広くもなかった部屋がよりいっそう狭くなったが、どうせ寝るだけの部屋だから、とポップは割り切っているらしい。
さて何故ベッドが2つになったのか？
本来は子供たちが3人仲よく寝れるように、とクイーンサイズのベッドを入手する予定だったのだが、ヒュンケルがポップの性別をジャンクに聞いて以来ポップをどちらかと言うと女の子として扱うので一緒に寝るのは良くないと判断したのだ。
3人で寝ていた時は少年のポップが真ん中であるし、ポップもメルルもまだ5歳と言う事で「まぁ良いか」と思っていたのだが女の子が2人では話が別だ。
ヒュンケルの父バルトスも言っていた。

女性は大切に扱いなさい、と。
嫁入り前の女性と同衾などもっての他である。
例え相手が子供でもだ。
メルルはどちらかと言うとポップを男の子として見ているようだが2人の中で互いが人生の伴侶になるのだから問題ないと思っているようだ。
しかし頭の中では半分は男の子と言うのは理解しているのだが、ヒュンケルはどうしてもポップを女の子として見てしまう。
最初の出会いで「この子供は女神に違いない」とか思ってしまったからだろうか。
抱きしめられた時に母性を感じてしまったからだろうか。
兎に角ヒュンケルは自分は違うベッドで寝なければいけないと言う使命感が生まれたのである。
それにしても妹になったポップとメルルは本当にかわいい。
欲目無しに見ても物凄く可愛い。
メルルは将来それは綺麗に育つだろう。
この年にして端正な顔立ちをしている。
ポップは中性的な美少女に育つだろう。
いや少年じゃないの?と思われるだろうがヒュンケルはどうしてもポップの事が女

の子に見えるので致し方ない。
ポップも女の子扱いしても怒らないから「まぁ良いだろう」とヒュンケルは思っている。
しかし可愛すぎるのも困りものなのである。
ポップとメルルは眠る前に「お休みのキス」をする習慣がある。
２人は唇を合わせるのだが、それをポップは自分にもしようとするのだ。
因みにメルルからは頬にお休みのキスをして貰っている。
唇のキスを拒んだら「何で？」と大きな目でヒュンケルを見つめコテン、と首を傾げるのだ。
「俺の妹超可愛い!!」状態のヒュンケルだが半分とは言え女の子の唇に血が繋がっていない男とキスさせる訳にはいけない。
「メルルと間接キスになる、メルルは将来のポップのお嫁さんだろう？そのメルルと間接キスになるのは男として考えさせられるものがある」
この言葉で納得してくれたらしいポップはヒュンケルのメルルがした方ではない頬にお休みのキスをしてくれた。
「お休みヒュンケル」
「お休みなさい義兄様」

ニッコリ微笑む2人はとてつもなく可愛い。
妹が可愛すぎてイキツラァ、と言うヤツだ。
隣で眠る体温が無くなったのは正直寂しいが可愛い妹の事を思えばそれくらい乗り越えられる。
ヒュンケルは出会って3日にして完全にシスコンと化していた。
……
「ヒュンケルは武器の扱いが上手いな。手入れに無駄がない。将来この武器屋を継ぐのはお前かもな」
商品の剣の手入れをしていたらジャンクがヒュンケルの頭を乱雑に撫でた。
「有り難う御座いますお父さん。でも武器屋は継げるか分かりません。俺、剣が好きなんで…将来は剣士になりたいんです」
ヒュンケルがしょんぼりと肩を下げる。
その肩をジャンクが力強く叩いた。
「やりたいことがあるのは良い事だ!その程度の事で落ち込むな。そして武器屋を継がないんなら世界一の剣士になれ!!」
義理の父はヒュンケルの事を心の底から自分の子供として扱ってくれる。
もちろんスティーヌもだ。

「はい、頑張ります!!俺の名が世界に知れ渡ってこのお店にお客がいっぱい来るよう世界一の剣士になります!!」

顔を上げたヒュンケルの目はジャンクの顔を捉え目をキラキラさせていた。

「世界一の剣士になれ」、その言葉が自分の育ての親であるバルトスまで認められた気がしたのだ。

「ついでにポップの剣の鍛錬にも付き合ってやってくれ。メルルと結婚するなら将来は男として生活するだろうから、多少男らしいことも出来る様にならないといけないからな。アイツは魔法の才能はあるようだが剣の方はからっきしだからな」

「ポップが魔法を使えることに気付いていたんですか!?」

「アイツは隠してるみたいだがな。多分スティーヌも気が付いている。メルルと2人して森に遊びに行くのも訓練の一環だろうこともな。多分お前も近々付き合わされるぞ」

「何故ポップとメルルはあんなに幼いのに戦う術を身に就け付けようとしているのでしょうか?」

「多分メルルが将来に何かを感じたんだろうな。メルルの占いはもはや予知の域だからな。だからヒュンケル、この家の長兄としてあの二人を護ってやってくれ」

「2人は俺の可愛い妹です!命に代えても守り抜きます!!」

「こら!この馬鹿が!!命をかけて守るのは良いが命に代えてじゃ駄目だ。お前が死んで

泣くのはポップとメルルだけじゃない。俺やスティーヌも居ることを忘れるな。お前はウチの家族なんだ。家族は誰一人欠けてもいけないんだ」

「お父さん…有り難う御座います。２人が教えてくれるその日まで、俺も皆を護る力を身に就けます」

「力を身に就けるのも良いが店番や武器の手入れも怠るなよ？お前は家族なんだから家の仕事はしっかりやれ」

「はい！」

最後に背中にバシン、と力強く叩かれジャンクは酒瓶を持って「知人に会いに行く」と家を出たがヒュンケルにはジャンクの乱暴にも見えるヒュンケルへの当たりが本当に自分を家族として見てくれているのだとより伝わり、ヒリヒリする背中の痛みに僅かに口に弧を描いた。

それを偶々見たスティーヌはたった3日でもう笑顔を浮かべれるようになったのだと喜んだ。

この日何時もより晩御飯が豪華だった理由は誰も知らない。

つづく

【長兄は待っていました】

ヒュンケルの朝は早い。

日の出とともに起き、軽くランニング（２０キロは軽くに入るのだろうか…？）をし、剣の型の練習。

筋力トレーニング。

それが終われば小川で軽く水浴びをして妹たちを起こす。

漸く家の改築が終わったので現在ヒュンケルは小さいながら自分の部屋を持っている。

納戸を片付けただけの部屋なのでベッドを置けばほとんどスペースは無いが、１つある窓は東向きなので日の出が分かりやすいし窓があることで埃っぽくはならないのでヒュンケルはこの部屋をとても気に入っている。

流石に思春期のヒュンケルは年が離れているとは言え女の子２人と同じ部屋と言うのは何とも言えずもどかしいモノがあった。

寝る時は寝てしまうので気にしないが、着替えの時などいくら相手が５歳の子供でも気が気でないのだ。

２人の妹は気にしていないようなのだが。
メルルの方は多少ヒュンケルに対して異性として気を使ってくれるのだがポップは違う。
自分が半分男なのと少年じみた性格もあってヒュンケルを一切異性として見ていない。
ヒュンケルが居ても所構わず着替えるし、時に寄ればヒュンケルと一緒に入浴を済ませそうとすることさえある。
流石に見兼ねたスティーヌがポップに言い聞かせていたが。
兎に角自分の部屋を持つまでモヤモヤとヒュンケルはもどかしい日を過ごしていた。
自分の部屋が欲しいあまり家の改築の手伝いも進んでおこなった。
お陰で予定より早く改築は終わったのだが。
納戸をヒュンケルの部屋とし、別の納戸と客間を増やすことになった。
相変わらずお休みのキスは続いているのだが。
コレに関してはヒュンケルも文句はない。
可愛い可愛い妹たちにキスを貰えるのは兄の特権だ。
シスコンと呼ばれようと構わない。
妹達が可愛すぎるのが悪い。

もし文句があるヤツがいるならポップとメルルの涙目上目遣いを喰らってみればイイ。

そうすればヒュンケルの気持ちも理解できるだろう。

あぁ此処にいるのは天使なんだな、と。

ポップに拾われて3か月。

ヒュンケルは順調に壊れて行っている。

主に精神面において。

そしてヒュンケルは妹達のおはようのキスを貰うべく2人の部屋を空けるのだ。

……

「ポップ、メルル朝だぞ」

「ん、おはようございますお兄様」

「ん～、はよヒュンケル」

「あぁおはよう」

可愛い妹のニッコリ×2、ヒュンケルは悶えたいのを抑えて理性を総動員して2人におはようの挨拶をする。

2人とも寝起きは悪くない。

笑顔のままメルルがヒュンケルの左頬にキスをし、右頬にポップがキスを落とした。

そしてヒュンケルも2人の額にキスを落とす。
（今日も妹たちが可愛すぎてイキツラァ!!）
ニヤケそうになる顔を表情筋を総動員させてクールな表情を保つ。
頑張る11歳である。
思春期なのだ、可愛い妹達に格好良いと少しでも思われたい年頃なのだ仕方あるまい。
「ヒュンケル、今日は朝食の後時間ある？」
階段を下りている途中で後ろからポップが声をかけた。
「あぁ今日は特に予定はないが」
「じゃぁ俺とメルルと一緒に森に遊びに行こう」
「分かった、ではお母さんにピクニック用の昼食を今日は3人前にして貰えば良いんだな？」
「ん、それで」
（来た！やっと来たぞ!!）
内心ヒュンケルがガッツポーズを取っているのをおくびに出さずヒュンケルはいかにも内容なんか気になりませんよ、の体でポップのお誘いを承諾した。
本当はかなり前からこの日を待っていたのだ。

ポップとメルルは森で何かをしているのは気付いていた。
恐らくソレが自己を高めるための鍛錬であろうことも。
何故幼い2人がそんなことをしているのか分からなかったが自分から首を突っ込むべきではないと判断しヒュンケルはひたすらポップの方から話がふられる日を待っていた。
何故そんなことをしているのかも気になるが、正直ポップの実力も戦士であるヒュンケルには興味があった。
鬼岩城に穴を空けるレベルのイオを放つポップの実力は並の大人の魔法使いより高いだろう。
妹に傷を付けたいわけでは無いが一度手合わせしてみたかったと言うのが本音である。
「でも大人には何してるかは内緒な、ヒュンケル」
ふわり、と花が綻ぶように笑うポップ。
その笑顔を見る度にヒュンケルには胸に甘い痺れが走り頬に血が上るのだが自覚症状はあるモノの、その感情にはまだ名前を付けられずにいた。

つづく

【妹たちは想っていた以上に規格外でした＜前編＞】

深い森の奥。
開けた場所にある湖の畔がポップとメルルの「ピクニック」の場所らしい。
「何時も此処で鍛錬しているのか？」
「ん、そう。さて始める前に――レムオル」
ポップが右手を掲げると一瞬周りの景色が歪んだ。
「!?何をしたんだポップ!?」
「レムオルだよ。知ってるだろ？姿を見えなくする魔法だ」
「その割には俺たちは透明になっていないぞ？」
「これは俺の改良版のレムオル。生物ではなく空間を隠すよう作動している。外から見た奴には普通の湖の景色が見えてるはずだぜ。因みに音も遮断する特別性」
ニマ、と得意気に笑うポップは本当に愛らしい。
ヒュンケルは今すぐにでもポップの頭を撫でたいのを根性で抑えた。
やはり妹の前では格好良いお兄ちゃんで居たいのだ。
「しかしレムオルと言うのはかなり高位の魔法ではなかったか？ポップ、お前はどのく

らいの呪文が使えるのだ？」
「攻撃呪文は下位全種類、その他補助呪文は全般覚えているぜ」
「それは…凄いな」
魔法使いは攻撃呪文の印象が強いが実質実力派の魔法使いと言うものは補助呪文のエキスパートであることは意外と多い。
常にクールに戦場を見極め仲間の補助をする。
補助は決して僧侶だけのものではない。
寧ろ肉弾戦で一切戦えない魔法使いこそ補助呪文を駆使しうるべきなのである。
それ故魔法使いの補助呪文はレベルの高いものが多い。
その全てを使えると言うのだからそれだけでポップの実力がうかがい知れる。
ＭＰのない戦士のヒュンケルでもそれくらいは分かる。
自分が魔法を使えないから余計にその凄さが分かると言うものだ。
アバンに師事を受けていた分、下手な魔法使いや僧侶よりその辺りの事は理解しているかもしれない。
「まぁ練習するのは主に攻撃呪文なんだけどな。ヒャド！」
言うが否やポップが湖にヒャドを放つ。
下位の呪文にも係わらずその冷気は並の魔法使いの数人分のマヒャド程の威力を

持って、随分な広さと深さをもった湖の水を1滴残らず氷に変えてしまった。
「それじゃぁ、ヒュンケル手合わせと行こうか」
ニッ、と笑ったポップはフワリと僅かに浮き上がり凍った湖の上に立つ。
「湖の上で手合わせか？」
「足場が悪いほど実戦では役に立つもんだぜ」
「成程、一理あるな。メルルはどうする？1対1で良いのか？」
流石にポップがいかに魔法使いであろうとも僅か5歳の少女に、しかも可愛い可愛い妹に傷など付けたくない。
「1対1でないとヒュンケルが分が悪いぞ。それと鎧の魔剣もＯＫ」
「流石にそれではポップの分が悪いんじゃないか？」
「あんまり俺を舐めていると痛い目あうぜ、ヒュンケル」
強い意志を宿した瞳がギラギラと輝き、口角を上げ笑うポップの笑みは壮絶とも言えるものであった。
ゾクリ、とヒュンケルの背筋に震えが走る。
戦士としての本能がその凄みを感じ取り武者震いを起こす。
同時にその笑みに壮絶な美しさを感じたヒュンケルは自覚のないまま雌を屈服させる雄としての本能を目覚めさせた。

（あらヒュンケル兄さんたらポップさんに欲を感じてらっしゃるわ。自覚は無いようですけど）

湖の畔で一人ニコニコと笑いそんな事を考えているメルルはもしかしたらこの中で最強なのかもしれない。